

# 闇市と都市

## Black Markets and the Reimagining of Tokyo

開館時間 10時30分—19時30分

高島屋史料館 TOKYO

4階展示室

していない。この状況は闇市を中心に復興が進んだ戦後の新宿の状況をよく示している。

**24 安田組マーケット（現・新宿西口思い出横丁）**  
安田朝信率いる安田組がつくったマーケットのうち、新宿西口思い出横丁として現存する部分である。安田組がひらいた闇市は「ラッキーストリート」と名付けられ、安田によれば終戦から間もなく、淀橋署の安方署長に呼び出され露店開設を要望されて始まったという。他の闇市同様に台やゴザを並べただけの青空市場としてスタートしたが、1946年夏以降に徐々にマーケットへと変わった。ここは1946年秋に火災が起きたことをきっかけに、1946年年末までに現在の新宿西口思い出横丁の仲通りの範囲がマーケットへと建て替えられた。一区画は間口7尺、奥行き9尺であったというが、この間口寸法は今の新宿西口思い出横丁の仲通りの建物の間口寸法と同じである。もともと民有宅地であったこの場所の土地を、営業者がまとめて購入できたことによって現在まで闇市的な風景が新宿駅前に残っている。

**25 安田組マーケット（現存せず）**  
安田組が青空市場としてつくった闇市ラッキーストリートが最初にマーケットになったのは新宿駅西口付近で、1946年夏からであった。一区画の大きさは間口1間半、奥行き2間半であった。秋からは北側からもマーケットの建設がはじまり、1947年初頭には青梅街道から新宿駅西口までが約300コマを持つマーケットになった。戦前に駅前広場と周辺の区画整理が行われたことで都市基盤が整備されていた西口は、東口のように戦災復興土地区画整理事業によってマーケットの立ち退きが求められなかったため、長く戦後の闇市的風景が続いた。営団地下鉄丸ノ内線延伸で西口に地下鉄出口を作る必要が出てきた1950年代半ばから立ち退きが進められた。一部の営業者は株式会社を使って営団用地を借地して共同ビル新宿西口会館を建設し、小田急百貨店本館となった場所の営業者は地下街小田急エースへ優先的に入居することを条件に立ち退き交渉が進められた。現在の新宿にも、姿を変えながらその痕跡が残っている。

よって、浅草や新宿二丁目のテキヤが食い込んできた。  
1949-51年にかけて都内で行われた露店整理事業では、新宿の400の露店商が一つの組合にまとまり都電車庫跡地の払い下げを受け、新宿サービスセンターを建設した。店内は、地下が食料品、1階が雑貨、2階が繊維品、3階が古物とアメリカ中古品と特売所、屋上の北側は子ども遊園地、南側はストリップ劇場のフランス座に小屋を貸し出していた。経営は百貨店形式で、個人経営の店は一店舗もない。すべての商品を共同仕入れ、共同販売し、組合員全員が理事長以下5部、3課に所属した経営者兼従業員であった。「昼夜デパート」をうたい、朝10時から夜9時まで営業し、従業員は2部制勤務であった。

**22 伊勢丹（現・伊勢丹新宿店／写真のみ掲載）**  
1886年に神田旅籠町に伊勢屋丹治呉服店として創業。関東大震災後に百貨店形式に業態を変え、1933年に新宿に現在の本店を開店させた。1935年にほていやを買収しその後増築していく。戦前は現在の本館の東半分が店舗であった。戦後は占領軍による接収を経て、隣地にあった都電車庫が移転し土地を購入できたことで増床を進めた。さらに丸物百貨店となっていた、新宿区の露店整理事業で建設された元新宿サービスセンターを取得し、1950～60年代に増床を進めた。

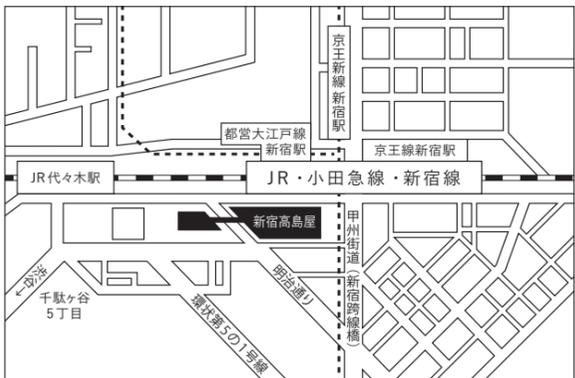
**23 紀伊國屋書店（現・紀伊國屋書店新宿本店）**  
戦後の紀伊國屋書店は前川國男設計により1947年に建設された。建築資材に限られた戦後の状況にあって、木造トラスを組み、吹き抜けの店舗空間を実現した戦後復興期を代表する木造モダニズムである。紀伊國屋書店は1927年に創業し、空襲で建物を焼失したが1945年末にはバラックで営業を再開した。前川が設計した店舗は、このバラックの建て替えてであった。ファサードは水平垂直が強調された構成で、開口部が間口いっぱいにとられ明るく軽やかである。紀伊國屋書店の敷地の新宿大通り沿いには木造バラック商店が十数軒並んでいた。それらの店を「門前町」として、書店の建物は奥まった場所に建設された。そのためメディアに発表されたパースに描かれた広い前庭は実現

**19 水平連続窓をもつ旧新宿マーケット**  
尾津組がつくった新宿マーケットの建物は、1948年4月には木造2階建てになっている。新宿大通りに面する北側と、西側の立面は看板建築となっており、2階には間口いっぱいの水平連続窓をもち、その上には小さな庇がついている。1949年の火災保険特殊地図には「二階 白鳩絹物研究所」と書かれており、二階は一体で利用されていたと考えられる。建築構法的には2階開口部の上の看板部分を支えるための柱が二階開口部にも続き、その柱間すべてに引き違い窓を設置することで間口いっぱいの連続窓をつくりだしている。木造のモダンな立面を持つ商店建築として新宿大通りの街角を彩っていた。

**20 三越（旧三越新宿店／現存せず）**  
三越が新宿に進出したのは関東大震災によって本店が罹災した後で、追分に三越マーケットを建設した。その後、二幸（20）を参照）の場所に分店をつくり、さらに1930年に現在のビックカメラ新宿東口店の場所に建物を建設して移転した（2012年閉店）。1949年の火災保険特殊地図に描かれた三越の建物は1930年の開店時の規模であるが、戦後に駅前と店舗周辺の土地を買収し、戦災復興土地区画整理事業で既存店舗周辺に換地できたことで、1960年代半ばに大幅な増床を行った。建物はビックカメラ新宿東口店として現存している。

**21 新宿大通りに並ぶ露店**  
1930年頃の新宿大通り、駅前から現在の新宿二丁目の太宗寺にかけて、260軒ほどの夜店が並んでいた。この夜店には3つの組合があり組合ごとに来店していたが、全体を束ねていたのは比留間重雄という平日商人（テキヤではない露店商）であった。当時、テキヤは緑日商人と呼ばれ、出店は緑日での露店商いに限られていた。戦前の新宿大通りの夜店は通りの北側と南側を10日ごとに移って片側を開けて営業していたという。戦後の新宿駅周辺の露店は、新宿大通りと西口の安田組のマーケット周辺に並んでいた。戦後の新宿大通りでは尾津喜之助の勢力が伸び、比留間重雄と縄張り争いが続いた。1947年夏には尾津が逮捕され、比留間も高齢で衰えてきたことに

\*「新宿東口（3枚合成）」（影山光洋撮影，1948年）パノラマ写真は新宿高島屋2階 JR 出入口外の壁面（ニューマン新宿側）に掲示しています



新宿高島屋（東京都渋谷区千駄ヶ谷5丁目24番2号）

### 闇市と都市 Black Markets and the Reimagining of Tokyo

会期=2025年9月13日(土)～2026年2月23日(月・祝)  
開館時間=10:30～19:30  
入館料=無料  
場所=高島屋史料館 TOKYO4階展示室(東京都中央区日本橋 2-4-1 日本橋高島屋S.C.本館)  
休館=火曜：祝日の場合は開館して翌日休館、年末年始：12月31日(水)～1月2日(金)

主催：高島屋史料館 TOKYO  
監修：石樽督和（関西学院大学建築学部准教授）  
グラフィックデザイン：原田祐馬、山副佳祐（UMA/design farm）  
展示デザイン：板坂留五（RUI Architects）  
担当学芸員：海老名熱実（高島屋史料館 TOKYO）  
©2025 高島屋史料館 TOKYO



2025.9.13 sat. - 2026.2.23 mon.

入館無料



このハンドアウトで示しているのは、占領復興期の新宿です。地図は1949年に描かれた火災保険特殊地図（火災保険料算定のために作成された市街地の地図1930年代から60年代頃まで描かれた）で、そこに1940年代後半に存在した4組のテキヤによるマーケットと露店の場所を示しています。地図にふられた

番号は、このハンドアウトの解説に加え、新宿高島屋2階 JR 出入口外の壁面に掲示しているパノラマ写真「新宿駅東口（3枚を合成）」(影山光洋撮影／1948年）ともひもづいています。さあ、このハンドアウトを携えて、いざ新宿へ!占領復興期と現代の新宿を楽しくトリップしていただければ幸いです。

**00** 二幸（影山光洋が撮影した場所）

1948年4月に影山光洋が新宿の写真を撮影したのは「食のデパート」二幸（元三越新宿分店）の屋上だった。

**01** 新宿駅（現・JR新宿駅）

新宿駅は日本鉄道品川線の駅として1885年に開設された。東京の郊外化とともに新宿駅のターミナル化が進み、1920年代に東口駅前には市電、西武電車、市営・私営のバス、円タクが集散する場所となっていた。駅舎は関東大震災で被災し、1925年に鉄筋コンクリート造2階建てで再建されていたため、戦災を受けても焼け残り戦後も利用された。

**02** 甲州街道

鉄道線路をまたぐ甲州街道。新宿のももとの中心は甲州街道と青梅街道の追分で、新宿初の郊外電車として開通した京王線が、1915年にターミナルとしたのも新宿追分だった。その後、京王は新宿三丁目に京王新宿駅ビルを建設して終着駅としていたが、1945年5月の空襲で変電所が被災し電車が甲州街道跨線橋の急勾配をのぼれなくなり、同年7月に陸軍が出動して現在の小田急線の西側へとターミナルが移設された。

**03** 和田組マーケット【露店部】

和田組は終戦直後、三越裏の焼け跡でゴザを敷いて闇市を開いていたが、地主から立ち退きを求められたため、淀橋署署長、区長と協議し「都の命令があり次第何時でも立退く」ことを条件に、ここに移転した。この辺りは1930年頃まではすべて東京建物の所有地であったが、1930年代後半、炭問屋、運送業、料理店などが建ち、土地の細分化が徐々に進み、戦中期には建物疎開が行われ空地となった場所である。露店部は三街区にまたがる和田組マーケットの一番北側の街区で、区画数は約200、一区画は1間×1間半であった。建物の屋根はV字になっており、露店を連ねて建物にしたような形をしていた。露店横行地として警察に申請されており10日単位で貸し出された。流動性の高いマーケットだった。

**04** 和田組マーケット【八十四軒部】

八十四軒部は三つの街区にまたがる和田組マーケットの中央の街区の範囲で、一区画は露店部よりも大きく1間半×2間、和田組親分の和田薫を大家とする賃貸契約のマーケットであった。店舗の内部は奥に畳二畳を敷いた店と、鉤の手型のカウンターを持つ店とがあった。2階以上を増築した店も写真では確認できる。

**05** 和田組マーケット【六十三軒部】

六十三軒部は三つの街区にまたがる和田組マーケットの一番南に位置する範囲で、一区画は八十四軒部と同規模。和田薫を土地の管理者（和田薫は公式な土地の権利者ではなかったが地代をとっていた）とする建売店舗であった。店舗内部は八十四軒部同様で、こちらも上へ増築している区画が多かった。駅前から離れ、南側へ行くほど上階は街娯に貸し出す売春の場となっていた。

**06** 新宿貨物駅（現存せず／写真のみ掲載）

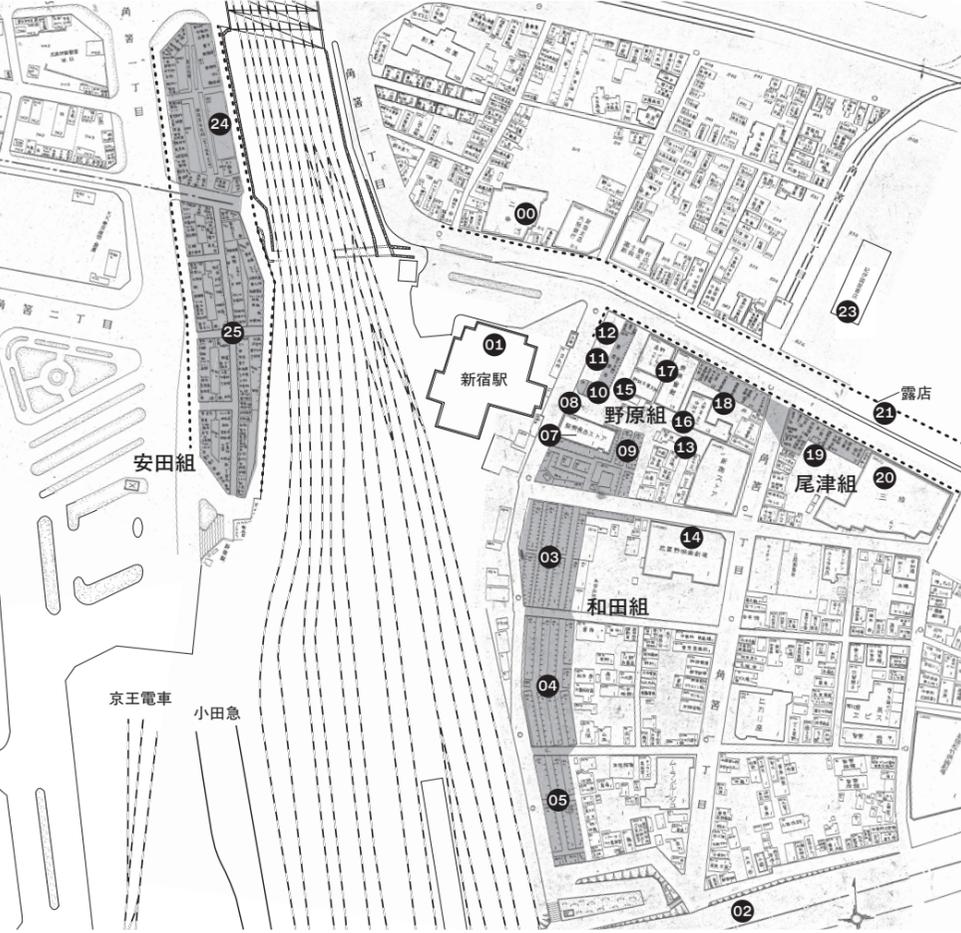
影山光洋の写真には、新宿貨物駅の屋根が見える。新宿貨物駅は1984年に廃止され、1996年10月に跡地を再開発したタカシマヤタイムズスクエアが開業した。高島屋は1950年代半ばから東口の民衆駅への出店を目指すが実現しなかった。高島屋の新宿への出店は40年の時を経て実現することとなる。

**07** 聚楽（現存せず）

戦前の新宿駅周辺では食堂や酒場の多くは裏通りにあった。とくに食堂が多く集まっていたのは、駅の東側一帯と、二幸横の食傷新道である。1938年の火災保険特殊地図を見ると駅の東に7軒の飲食店が並んでいるが、一際目立つのが聚楽である。鉄筋コンクリート造地上5階、地下2階の建物は飲食店専門の百貨店として1934年に開店した。戦中期には建物疎開によって聚楽周辺の木造建物が撤去され、建物の側面に戦闘機が描かれた。戦後は闇市に囲まれ、戦災復興土地区画整理事業では駅前広場を造成するために曳家（建物を解体せず持ち上げて移動させる技術）された（現・ヨドバシマルチメディア新宿東口の店舗の場所）。影山光洋が写した写真では、壁面に「地階喫茶と洋食、一階食品ストアー、二階一般お食事、三階小間お座敷、四階?近日完成、五階?近日完成」と書かれている。影山が撮影した1948年4月当時は地階から3階までの営業であったようだ。

**08** 駅前から高野・中村屋の裏へつづく路地（現存）

戦前、この路地が入っていく街区に路地はほとんどない。建物が建て詰まり、商店は道路に面していた。戦中期に建物疎開によって駅前の木造建物群が取り壊され、空襲を受けて鉄筋コンクリート造の建物と土蔵だけが焼け残った。復興期、ここには野原組がマーケットをつくって何本もの路地がつくられた。他方で、中村屋は敷地の奥にある鉄筋コンクリート造のビルが焼け残ったが、新宿大通り側の大きな町屋を焼失し、そこに尾津組の新宿マーケットが建設されたため、焼け残ったビルに客を入れることができなくなってしまった。やむを得ず、中村屋は裏（南側）から焼け残ったビルへ客



1949年の火災保険特殊地図（都市整図社作）に加筆

を入れて営業を再開する。その時、駅からの客の動線として案内したのがこの路地である。本来道路ではなかった路地だが、戦災復興土地区画整理事業では、この路地が継承されるように道路がつくれ、曳家された聚楽（現存せず）と中村屋、高野の間に今も残っている。

**09** 野原組マーケット①

野原組マーケット①が建設された土地は戦中期に交通疎開空地として東京都に買収されていた。新宿駅東口で交通疎開空地となった土地は1947年9月までに戦前の地主に返還されているか、1948年に払い下げによって民有地となった。これと並行してこの場所では、1947年7月ごろから野原組（親分は野原松次郎）が縄でパワリして闇市を組織しつつあった。その後時期は明確ではないが、1947年秋から翌48年春の間に野原組マーケット①は建設されている。1947年末、都有地から民有地に戻った元交通疎開空地を、尾津喜之助と

までに駅前からこの野原組マーケット②を隠すように壁が建てられている。このマーケットができたのは1948年1月から4月の間で、1店舗は6尺×4尺5寸（1.8×1.4m）、屋台ほどの規模で数名座るのがやっとの大きさであった。この野原組マーケット②が建設された土地は、戦中期は交通疎開空地として都有地になっていた土地で、その多くは1948年に尾津喜之助が払い下げを受けている。尾津の土地取得が野原組マーケットの建設の背景となった可能性が高い。

**11** 駅前の空地

これも戦中期は交通疎開空地として都有地になっていた土地で、1948年に尾津喜之助が払い下げを受けた土地である。影山光洋の写真では植樹され、看板が立っている。1952年、保釈された尾津喜之助が龍宮マーケットをここに建設する。ここは駅前広場となる土地であったため、建築物の建設が認められていなかった。龍宮マーケットの建物の施工をしたのは野原商事（元野原組）で、建築物とは認められないよう簡易店舗をつくった。

**12** 駅前の靴みがき

影山光洋の写真では、ここには日除けや傘もない人々が密に座っている。靴みがきを生業とする人々だ。新宿に限らず靴みがきも戦後の駅前の風景の一つであろう。ここは1948年に尾津喜之助の所有となっていた土地で、1952年に尾津喜之助がここに龍宮マーケットを建設するまで靴磨きが並ぶ。

**13** 焼け残った土蔵

1948年の影山の写真には土蔵の屋根が見える。1945年9月に影山光洋が撮影した写真にもボンと建つこの土蔵が確認できる。戦災を超えて新宿駅前に存在した。

**14** 武蔵野館（現・新宿武蔵野館）

1920年開業の映画館。1928年に建物を建設して現在の位置に移転し、洋画専門館として開館。

**15** 高野の西側出入口（現存）

1949年の火災保険特殊地図で「高野フルーツパーラー」と書かれた建物が高野本店ビルである。この建物の南に接して、高野は戦後早い時期に木造防火建築を増築している。それがこの出入口がある部分である。野原組マーケットと高野本店ビルの間に路地があり、そこから出入できるようになっているが、戦前は建物が建て詰まっており路地はない。戦中に建物疎開が行われなければできなかった動線である。1949年の火災保険特殊地図では、この建物には野村専太郎の野村工事（1948年7月に野村組から改称）が入居している。高野は鉄筋コンクリート造の建物であったため、戦災復興土地区画整理事業では移動していない。区画整理後もこの出入口の利用を継続できるよう計画され、現在も高野はここに店舗入り口を持っている。

**16** 中村屋（現・新宿中村屋）

中村屋は1901年東京の本郷で創業、新宿の現在の場所に支店を移したのは1909年。戦災を受ける前の中村屋は、木造二階建ての大きな町屋を新宿大通り沿いに建てており、その裏に鉄筋コン

クリート造6階建ての建物を持っていた。木造の町屋が焼け、そこに尾津組の新宿マーケットが建設されたため、焼け残った中村屋のビルは接道しなくなってしまい営業が再開できなかった。やむを得ず、南側の土地を借地していた安田善一（後の安与ビルオーナー）にビル上階を貸す代わりに、土地の一部を貸与する交渉をし、中村屋はビル南側の路地からお客を入れることで営業を再開した。1949年の火災保険特殊地図には中村屋のビルに「上部ニューホテル」の記載がある。これは安田善一が経営する宿である。

**17** 高野（現・新宿高野）

高野は1885年新宿で創業。戦前に新宿大通りに並んだ2棟の鉄筋コンクリート造の建物を建設していた。1949年の火災保険特殊地図で「高野フルーツパーラー」と「東横會館」と書かれた建物である。高野は戦災で営業を停止したが、1947年1月に仮営業を始め、2月には東側の棟で本格的に業務を再開した。同年3月からは、この東側の棟の地下と2・3階が東横興業に貸し出され東横会館として利用された。他方で、尾津喜之助によれば、西側の棟では同時期に尾津が無料診療所を開いていたという。この診療所は1948年初頭までに裏通りへ移動するが、その移転の交渉を仲立ちしたのが野村専太郎だった。野村を社長とする野村組は1948年4月から高野本店ビル（西側の棟）に入居し、その後に新宿大通りから靖国通りへの都電路線変更工事、新宿の露店整理事業で建設される新宿サービスセンターの施工など、新宿駅前の事業を一手に請け負っていく。1948年4月撮影の影山光洋の写真には高野本店ビルの壁面に「GENERAL CONTRACTOR NOMURAGUMI CO., LTD. 株式会社野村組」と書かれている。

**18** 新宿マーケット（尾津組）

尾津喜之助によって新宿大通り沿いの焼け跡を整理して建設されたのが新宿マーケットである。三越の西から中村屋の北側、すなわち高野の東側まで連なった建物であった。1945年8月中に、全32コマになる店舗のうち、12コマをオープンさせた。尾津によれば、建設時には淀橋署署長に許可を得たというが、建物疎開跡地ではなく民有地の焼け跡であったことから復興が進むと地主や借地人から立ち退きを求められるようになった。新宿マーケットが建ったことによって中村屋は新宿大通り側から客を迎え入れることができなくなってしまった。1947年6月、尾津は土地問題で地主を脅迫したとして逮捕され、尾津組は同年7月に解散、新宿マーケットの管理会社として尾津組商事株式会社が設立された。この時には新宿マーケットは直営ではなくっており、マーケットの建物は占有者へ売られていた。地主側は占有者を相手に土地の「不法占拠」で訴訟を起こし、結果占有者が「不法占拠」であることが確認され、同時に占有者は占有権を認められた。以降地主へ地代を支払い公式な借地人となった。裁判の結果を受けて立退く店舗もあり、1948年夏頃には中村屋は土地の一部を取り戻した。1949年の火災保険特殊地図を見ると、新宿マーケットであった中村屋の北側の長屋の一部が「中村や菓子」と表記され、中村屋によって使われていることがわかる。